

2020年6月14日（日）聖霊降臨節第2主日礼拝

久宝教会創立61周年記念礼拝・花の日こどもの日礼拝

メッセージ「埋もれた宝」

牛田 匡 牧師

聖書 マタイによる福音書 13章44-50節

丁度61年前の今日、私たちの久宝教会は、創立されました。昨年度が創立60周年という区切りのよい年でしたが、今年の春に柏原市から再び八尾市久宝寺の地に教会が戻って来ることが決まっていたので、故郷に戻って来てから、地域の方々も交えて、改めて創立61周年の歩みを感謝する礼拝をしたいと考えていました。もしも、今回の新型コロナが無ければ、先週には保育園の子ども達、卒園児の子ども達、保護者の方々などを招待して、新しい園舎のお披露目会を兼ねた献堂礼拝をして、みんなで楽しく過ごすはずでした。しかし、コロナでその計画も頓挫しています。

「もしもあの時、そうじゃなければ、こんなはずじゃなかった」……。私たちは過去を振り返って、しばしばそのように考えます。つい半年ほど前までは、誰もこのような事態になるとは予想だにしていませんでした。しかし、現実はこのようになりました。何故、今、このような現実になっているのか。そこには意義や目的があるのか……。それはすぐには分からないかもしれませんが、私たちは一人一人、今この現実が与えられている意義や目的というものを、見出して行くことが求められているのかもしれませんが、また言い換えるならば、見出して行くことが出来る、その能力^{ちから}も与えられているのではないかと思います。

今日も始めに「埋もれた宝」をご一緒に歌いました。普段あまり歌わないこともあって、なかなか歌うのは難しい賛美歌ですが、週報にも印刷している歌詞を改めて眺めて見ると、見るたびに、この歌にはキリスト教の「宣教」というものが、上手に表わされていると思わされます。

「①畑の中に埋もれた宝、気付いていない人にとっては、ただの畑の土。しかし、その中にこそ宝がある（マタイ13:44）」

「②豪華なお城の中にはではなく、粗末な家畜小屋の馬槽^{まぶね}（飼い葉桶）の中に、『まさかこんな所に』と思われる所に生まれた赤ちゃんこそが、救い主だった（ルカ2:6-7）」

「③落とせば割れてしまうような土の器である私自身の中にも『埋も

れた宝』は確かにあり、輝いている（第 2 コリント 4：7）」

「④そのような『埋もれた宝』は、隣人である仲間たちの中にも見つけることができ、その実りを『収穫の主』と一緒に私たちは刈り取る（マタイ 9：37-38、ヨハネ 4：38）」

という内容です。

この賛美歌が、小林先生と親しかった八尾東教会の有澤^{つぐとし}禧年先生から贈られたのは、旭丘まぶね保育園が開園した 1982 年頃だそうですが、その頃に「この教会には夢がある」と歌いながら、それぞれの人が連想していたことは何だったのでしょうか。その後、今から 22 年前の 1998 年に「久宝伝所」は、伝道所開設から 39 年を経て「久宝教会」となりました。記録によると、当時は 4 つになった施設の職員たちや、ボーイスカウトに集まった子どもたちを含めて、100 人以上が毎週礼拝に集って来ていたそうです。「この教会には夢がある」と歌いながら、「神様の恵みを受けて、ここまで大きくなりました」と思っていた人もいたかもしれません。

創立から 61 年を迎え、少子高齢化の時代を迎え、そしてコロナの時代を迎えた今、私たちはこの「埋もれた宝」という賛美歌に込められた「この教会の夢」というものについても、もう一度考え直す時なのかもしれません。

今日の聖書の箇所は、この賛美歌の出典ともなっている「畑の中に隠された宝」のたとえ話です。この「マタイによる福音書」13 章には、イエス様がガリラヤの貧しい民衆たちや弟子たちに語られた「たとえ話」が並べられてまとめられています。それぞれが一カ所で同時に語られたわけではなく、色々な場所で様々な機会に語られた話が、印象的な話として人々に記憶され、口から口へと伝えられ、それが後に記録されてまとめられたと考えられています。ですから、このようなイエス様の話を読む際には、それが語られた相手が、どのようにそれを聞いたかをよく考えてみる必要があります。

44 節です。「天の国は、畑に隠された宝に似ている。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をすっかり売り払い、その畑を買う」……。私が最初にこの話を聞いた時、なぜ宝を見つけた人は、すぐにそれを掘り起こして持って帰らなかったのか、と不思議に思いました。畑にはその他にも、まだまだ沢山、宝の入った壺が埋まっていると考え、わざわざ畑ごと買ったのでしょうか。現代の感覚からす

ると、そのように考えるかもしれません。しかし、2000年前の当時のガリラヤの人々にしてみるとどうだったでしょうか。

まず「畑」は売買の対象ではありませんでした。大地の実りをもたらす畑、「土地は人間のものではなく神様のものであり、それは売ってはならない」と律法で定められていました（レビ 25:23-28）。しかし、現実には貧しさのあまりに先祖伝来の土地を借金のかたとして手放さざるを得ない人々が昔からいました。レビ記には「貧しくなって、所有地を売っても、買い戻す権利を放棄してはならない。兄弟や本人がいずれ買い戻さねばならない」とも記されています。イエス様がたとえ話を語られたガリラヤの農民たちは、重税に苦しめられ、借金のかたに先祖伝来の土地を奪われ、小作農となっていた人たちがほとんどでした。彼ら聞き手にとっては、「畑を買う」とは、「先祖伝来の土地を買い戻す」という意味に聞こえた事でしょう。もちろん、貧しかったわけですから、「持ち物をすっかり売り払った」所で、土地を買い戻せるだけの大金が手に入るはずもありませんでした。

ですから、このたとえ話は、「畑の中に、大判小判がぎっしり詰まった壺が埋まっているよ」ということではなく、「宝は、あなたたちが毎日汗水流して働いている畑に、他にもないその場に埋まっている。それは持ち物をすっかり売り払ってでも、その土地を買い戻したいと思うくらいに、大切な価値のあるものなんだ」という意味だったのではないのでしょうか。

続く 45 節は「真珠」のたとえです。当時は真珠の養殖技術もありませんから、天然の真珠しかありませんでしたが、大変貴重だったそうで、古代エジプトの女王クレオパトラ（B.C.E.1c）が持っていた真珠は一粒で何千万円の価値があったと言われていています（10,000 セステルティウス = 2,500 デナリオン、プリニウス『博物誌』）。イエス様も人々も実際の真珠を見たことは無かったらうと思いますが、「大変高価なもの」の代表として真珠と言ったのでしょう。そしてイエス様はいつも真珠を、「貧しい人々」をたとえるものとして、語っています。

有名な「豚に真珠を投げるな」（マタイ 7:6）というのは、「真珠であるあなたたちの価値を、豚である律法学者たちは理解できずに、踏みこみにじって来るから、彼らを相手にするな」という意味に他なりません。ですから、ここで「天の国は、良い真珠を探している商人に似ている。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り

払い、それを買う」と言われているのは、「天の国は、他でもないあなたがた一人一人を尋ね求めています。いつも権力者からイジメられ、搾り取られ、価値のない者として扱われているあなたたちこそ、高価な真珠であって、その一人のために、全ての持ち物を売り払ってもいいだけの値打ちがあります」ということでした。

最後の47節以降は、ガリラヤ湖で魚を取っていた漁師たちにとっては、分かりやすいたとえ話だったでしょう。引き網は色々な魚を引き上げる、つまり全ての人を包み込むけれども、良いものと悪いものが分けられる。抑圧から解放される者（救われる者）と、抑圧する者とが分けられる、ということです。

今日の招きの詞でも読みましたが、古代イスラエルの民とは、古代エジプトでの奴隷の状態から、命の神ヤハウエによって導き出された人々でした。権力者から踏み付けられ、イジメられ、搾り取られ、価値のない者として扱われているその小さくされた人達にこそ、神様の力が働き、解放の業が起こる……。それが聖書の伝える物語であり、イエス様の歩みでした。

埋もれた宝、高価な真珠、それは神様から生かされている私たち自身の中にあるものです。自分には出来ない、価値がないと周りから言われるままに、思い込んでいたり、自分でも決めつけたりしていると、それは決して見つかりません。しかし、神様はそんな私たち一人一人を、宝とし、真珠として下さっています。

土地が神様のものであるように、私たちの命も神様のものです。私たちの中にも、隣りの人の中にも、埋もれた宝はあります。それを隠したままにせず、互いに大切にしていきましょう。「まぶねに生まれた主イエス」は、神様から一番見離されていると思える所、こんな所に神様はいないと思われる所にこそ、神の子が生まれた、神様が共におられるということです。

「この教会には夢がある」……。それは規模の大きさや人数の多さではなく、一見、価値がないとされているものの中にこそ、神様の力が働き、価値あるものとされていくということ。倒れていた人が再び引き起こされ、立ち上がらされていく歩み。そのことの証人、生きた証し人として、歩んで行けるということが、この教会の夢なのではないかと思えます。私たちは今日も、神様から生かされている者として、神様の導きに従って歩み出して行きます。